



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4345 号 2018.4.28 発行

「ココ・ファーム」で熟成した技、北アルプスで実る ワイン醸造家・矢野さん



東京新聞 2018年4月27日
ブドウ畑でブドウの木をチェックする矢野さん（左）と妻久江さん＝昨年12月、長野県大町市の矢野園で

足利市にあるワイン醸造の名門「ココ・ファーム・ワイナリー」で10年余り修業したワイン醸造家矢野喜雄さん（48）が、長野県大町市に移住し、醸造所の開設を目指しブドウを栽培している。「ワインは土地の味が出る。北アルプスの麓の大町らしい味わいを表現したい」と意気込んでいる。（林啓太）

埼玉県嵐山町出身。東京で建設関連の会社に勤めていた二十余年前にワインにはまった。ココ・ファームには二〇〇〇年五月、同僚の紹介で初めて訪れ、のどかな自然の中でブドウの木の苗を植えた。土日に泊まりがけで作業を手伝うようになり、〇三年八月に会社を辞めてココ・ファームの職員になった。

ココ・ファームは〇〇年に九州沖縄サミットの晩さん会でワインが乾杯に用いられて有名になった。障害者支援施設の関係者が運営し、施設の利用者もワインの仕込みや瓶詰めなどの作業に携わっている。矢野さんは「みんな生き生きと働いている。別世界だった」と振り返る。

そこでは、米国人の名醸造家、ブルース・ガットラヴさんにブドウの栽培や醸し方を教え込まれた。〇八年の北海道洞爺湖サミットで提供された「風のルージュ 2006」の醸造にも携わった。

「醸造でブドウの質は、保てても高められはしない。質の高いブドウの栽培が何より大事ということがブルースさんの教えだった」

自分で醸したワインを世に問いたい、との思いが募った。ココ・ファームを一三年末に退職し、翌一四年二月に大町市に移り住んだ。決め手は、夏に涼しく昼夜の寒暖差が大きいのに加えて「花こう岩に由来する土壤に恵まれていること」。こうした土壤は水はけが良く、仏ボージョレなど海外にも名産地がある。

大町市の花こう岩に由来する土壤は、北アの扇状地にある。本州を南北に横断するフォッサマグナ（大地溝帯）の活動でできた。「大地の壮大な歴史の中でブドウを育てたい」と語る。

ブドウ畑は妻久江さん（46）と広げ、今は約四千本。初年に植えたシャルドネやピノ・ノワールなどを昨秋、初めて収穫した。一部は糖度が二三度に上り、味の決め手の酸度も果汁百ミリリットルに一グラムと高めだった。

「普通は糖度が上がれば酸度は落ち、平板な味になる。大町の条件の良さを実感した」。長野県内の友人の醸造所で醸し、五月頃にボトル約四百～五百本を出荷する予定。

醸造所の建設計画は、大町市が三月に、醸造の免許の条件である年間の最低の醸造量が

六千リットルから二千リットルに下がった「ワイン特区」となったことを受けて、来年十月にも操業できるよう進めている。

「僕のワインを目当てにお客さんが来て、北アルプスを眺めながら飲んでもらえるようになれば最高です」と、そのときを待ち望んでいる。

発達障害生徒に「合った学校考えたら」 発言教諭を告訴 朝日新聞 2018年4月27日

長崎市の純心女子高校に3月まで通っていた発達障害のある女子生徒（16）に、当時の担任の女性教諭（56）が「あなたに合った学校を考えたらどうか」などと不適切な発言をしていたことがわかった。生徒は4月に転校し、保護者は26日、暴行や名誉毀損（きそん）、侮辱の容疑で教諭に対する告訴状を浦上署に提出した。

告訴状によると、生徒は教諭から昨年9月以降「障害者が来る学校ではない」「ほかの学校に行った方がいい」などと侮辱され、それが原因で適応障害と診断された、と訴えている。

学校によると、教諭は学校側の聞き取りに対し、生徒と学校生活についてやりとりする中で「周囲のサポートを遮断するから学校生活も障害も改善されない」「あなたに合った学校を考えたらどうか」などと発言したことを認めた。一方で障害を差別するような言動は否定しているという。

教諭は「生徒への共感や思いやり、配慮が足りなかった。申し訳なく思っている」と話しているという。学校側は「不適切な発言のため、心情を害する状況になり申し訳ない。今後、当時教諭のクラスにいた生徒や保護者へのアンケートなどを行い、対応していきたい」と話した。

生徒の父親（46）は取材に「学校とは食い違いが多々ある。次の被害が出ないように、学校にも変わってもらいたいと思い告訴した」と話した。保護者は25日、長崎地方法務局に人権救済の申し立てをしている。

長男監禁容疑の父「数年前にも妻と親族が市に相談」 朝日新聞 2018年4月27日

障害のある長男（42）を檻（おり）に閉じ込めたとして、兵庫県三田（さんだ）市の無職山崎喜胤（よしたね）容疑者（73）が監禁容疑で逮捕された事件で、山崎容疑者が「数年前に妻と親族が市に相談に行った」と県警に説明していることが、捜査関係者への取材でわかった。長男は市の福祉サービスを受けずに20年以上にわたり檻で生活させられていたとみられ、県警は経緯を詳しく調べている。

捜査関係者によると、当時の相談について、山崎容疑者の妻とともに市を訪れたという親族の女性も「（妻が）障害のある息子の将来が心配だ、と市に訴えたが、本人を連れてきてほしいと言われ、立ち消えになった」という趣旨の説明を県警にしているという。

妻は今年1月下旬に病死。山崎容疑者はこの直前、妻の介護について福祉関係者に相談し、檻についても打ち明けた。保護された長男は片目を失明し、もう片方の目もほとんど見えなくなっていたほか、腰も曲がった状態だった。

三田市はこれまで、20年以上前に山崎容疑者が複数回、長男について相談していたことを明らかにしている。一方、数年前の相談については取材に「記録に残っておらず、わからない」とした。5月上旬に専門家による第三者委員会を発足させ、対応を検証する。

<ともに> 伝統産業を継ぐ（上） 中日新聞 2018年4月25日

障害のある人が働く場として、後継者不足に悩む伝統産業が注目を集めている。障害がある人の中には、長時間の集中力や、絵やデザインの才能がある人が少なからずおり、手作業が多い伝統産業ではこうした能力を生かせる工程があるからだ。就労を間近に控え、

行き先に不安を抱えた若者のために、京友禪の染色技術を生かした取り組みを始めた福祉施設を訪ねた。

「まぜまぜしてごらん。さあ、どうなるかな」

静岡県伊東市の一般社団法人「ひかり」が運営する、障害のある子どものための放課後等デイサービス（放デイ）。一月に開かれた植物染色の体験会で、法人の代表理事、生田一舟（いっしゅう）さん（50）が山桃の木から作った茶色い液体の染料が入ったボウルを差し出した。

生田一舟さん（左から2人目）らの指導で、工程の一部を体験する生徒たち＝静岡県伊東市で

染料に漬けて茶色くなった白い布を、続けて色素定着用の透明な液に漬けると落ち着いた黄色に。化学変化に、作業した知的障害のある十代の男子生徒二人は目を輝かせた。「一番楽しい色の変化を見せたかった」。子どもたちの表情に生田さんはほほえんだ。



生田さんは禅僧でもある。二〇一六年五月、お堂の一部で放デイを始めた。以前は大手銀行に勤めた。しかし、利益偏重の姿勢など銀行のありように悩んだころ、仏教に出合い僧侶になった。行員時代に社会貢献活動に携わった経験から、子どもの役に立ちたいと放デイを開き、現在はダウン症や知的障害、発達障害のある県内の六～十七歳の三十三人が通う。

絆が深まるにつれ、気になるのは子どもたちの将来だ。来春には、四人が特別支援学校高等部を卒業する。通ってくる子どもが高等部を卒業するのは初めてのことだが、生田さんは「就労まで切れ目のない支援をしたい」と自ら就労施設を立ち上げることにした。

どんな仕事に向いているのか。真っ先に頭に浮かんだのが、知人で京都市の友禪作家の山本晃さん（74）だ。京友禪の世界で長く途絶えていた、梅の木の皮や根を煮出した液を染料とする草木染めの「梅染め」の技法を復活させた名匠だ。

生田さんが山本さんに出会ったのは数年前。僧侶として生きる決意を固めようと訪れた京都・知恩院で、たまたま開かれていた展示会で山本さんの作品に出合った。「こんな色彩があるのか」と感銘を受け、連絡を取り合う仲になった。

梅染めは手間ひまかかる上に明治時代には途絶えていた。古文書と格闘するなど約二十年かけて復活させたが、着物の需要も細る中、後継者は育っていなかった。生田さんの呼び掛けに心が動き子どもたちの指導を引き受けた。

生田さんは、障害者が働くためには一人の作業範囲を狭めることが必要と考えた。京友禪の製造工程は染料作り、デザイン作成、染料を布地にぬる作業など十二に分けられ、各工房を回って完成する。山本さんは全ての工程を一人で担うが、生田さんは「個性に合った作業を見つけて能力を伸ばしていけば、皆で伝統を継承できるかもしれない」と自信を深めた。

一六年秋から、放デイの活動などで染色体験を重ねた。生徒たちの反応に手応えを得た生田さんは、昨年七月、お堂の近くに工房を開設した。

◆「伝福連携」の取り組み

伝統産業と福祉が連携して、障害者の雇用を生み出す取り組みは「伝福連携」といわれ、京都市などで始まっている。

同市では後継者不足は大きな課題。例えば京友禪・京小紋に携わっている人は二〇〇六年に約二千三百人いたが、一四年は千人を切っている。

そうした中、昨年は精神障害のある男性が京ろうそくの会社に絵付け師として就職した。市の担当者は「非常に細かく根気のいる作業だが、男性の商品は他と比べても遜色ない」と話す。「後継者難の伝統産業を担う人材として、障害者と伝統産業をつなぐことができれば」。今年四月、京鹿（か）の子紋のメーカーでも、発達障害の男性が働き始めている。（砂

本紅年)

<ともに> 伝統産業を継ぐ(中)

中日新聞 2018年4月26日

静岡県伊東市の山あいの田んぼ。昨年六月、一般社団法人「ひかり」(同市)が運営する放課後等デイサービス(放デイ)に通う子どもたちの笑い声が響いた。

この日の活動は、田植え体験。子どもたち約三十人がもち米の苗を植えた。田植えは全員初めて。田植えの合間には、泥だらけでザリガニを捕まえたり、近くの川で水遊びをしたりして大はしゃぎ。休耕田を借り、水田として復活させた「ひかり」代表理事で僧侶の生田一舟(いっしゅう)さん(50)は目を細めた。

実は、この田植えも京友禅の準備の一つ。もち米の一部は、下絵の輪郭をなぞる防染剤「ふせのり」の原料となる。染色作業は、就労継続支援B型事業所「梅染工房ひかり」で行われる。来年春に特別支援学校高等部を卒業する若者の就労場所にと、生田さんがお堂の近くに整備した。

工房の方針は、化学染料を使わないこと。他の工房の下請けをするのではなく、染料の原料となる植物の採集・栽培までさかのぼり、生産工程のほぼすべてを担う計画だ。生田さんは「自然を味方につければ、絶対にまねできない製品が作れる」と力を込める。

例えば防染剤。友禅作家の多くはゴムのりを使う。安価で扱いやすい半面、のりを洗い流す時に化学薬品が必要になる。「ふせのり」は、水で洗い流せるので環境負荷は少なく済む。

自然豊かな伊豆では、工房の周りで染料の材料がいくらでも採れる。庭にはニホンアカネや大きなビワの木がある。野山には山桃が群生し、ウメノキゴケも多い。藍色の染料となるタデアイなど自生していない植物は、田んぼの隅に植えて栽培する。染色で使う媒染液も、ツバキの葉などから作った。

原材料を自ら採取・栽培したり、作ったりするのは自給自足の形に近づけたいから。「放デイと工房の助け合いがあれば、お金に頼らなくて済む範囲が広がり、安心感も増す」

生田さんが工房で実現したいのは、ともに支え合うコミュニティだ。放デイを利用する子どもには障害の重い子もいる。雇用契約を結んで働くA型事業所や一般企業での就労は難しくても、B型なら幅広く受け入れられる。そういう行き先が近くにあることは、放デイの子どもたちや家族にも、大きな安心となるはずだ。

こうして開いた工房では現在、障害のある女性二人と職員が、技術の習得と製品の開発を進めている。友禅作家の山本晃さん(74)＝京都市＝が月の半分、伊豆に滞在して指導。視覚障害のある女性(64)は「自然に含まれている色を役立てるのはいいことだと思います」と笑う。放デイ利用者のうち生徒二、三人も来春から工房で働く予定だ。

工房で作った初の商品は、植物染色の良さが発揮でき、肌にやさしい和ざらしのふんどし。ビワ、山桃、タデアイなどで染めた風合いのある品を、地元自治体のアンテナショップなどで販売したところ、百枚近く売れた。山本さんから技術を受け継ぎ、着物にこだわらず商品を開発、製造していくつもりだ。

B型事業所で働く障害者の工賃は全国平均で月に約一万五千元。最低基準の三千元を下回ることもある。生田さんは「梅染工房ならではの商品だからほしい、と思える独自の商品を作り、高い工賃を支払えるようにするのが目標」と話している。(砂本紅年)

<就労継続支援B型事業所> 毎日働くことが難しいなどの事情があり、一般就労や雇用契約を結んで働くことが困難な人が主な対象。全国で約21万人が利用している。軽作業などをし、工賃を得る。事業所には国からの給付費があるが、4月の報酬改定で、7割の事業所で減収となるとの調査もある。就労継続支援事業所にはA型もあり、雇用契約に基づく就労が可能な人が対象。約6万人が利用している。

<ともに> 伝統産業を継ぐ(下)

中日新聞 2018年4月27日

山桃の木の皮を削る菊地直斗さん(左)に付き添う生田一舟さん=静岡県伊東市で



「先生の手を離すなよ」

静岡県伊東市の一般社団法人「ひかり」代表理事の生田一舟(いっしゅう)さん(50)がやさしく語りかけた。放課後等デイサービス(放デイ)の染色体験。利用者の菊地直斗さん(17)の手をとり、染料にする山桃の木の皮をなたで削った。

「木、痛いよー(木が痛そうだよ)」。木を心配して声を上げる直斗さんを、生田さんが「よし、上手、上手だよ」と励ます。見守る母の貴子さん(47)は「ここで一生の仕事ができれば」と願う。

貴子さんは妊娠中、妊娠高血圧症候群を発症。直斗さんは約一三〇〇グラムの小さな赤ちゃんとして生まれた。体の発育も言葉も遅く、重度の知的障害で言葉の理解が十分でない。純粹

なままで、周りから「かわいい」「癒やされる」と言われることもある。しかし、約十年前に離婚したこともあり、一人っ子の行く末は心配だ。

直斗さんは特別支援学校高等部三年。以前から来春の卒業後は、障害者が工賃を得て働く就労継続支援B型事業所で働くことを希望していた。だから、生田さんが昨年七月、B型事業所「梅染工房ひかり」を立ち上げたのは願ってもない朗報だった。

工房の仕事は、野山に分け入り、染色に必要な木、枝、皮、実などを採集することから始まる。直斗さんは放デイの染色体験でも、ドングリを拾ったり、草木を集めたりと楽しそうに作業していた。

生田さんは「直斗さんは穏やかだが、集中力がすごくある。何より働こうという意欲があり、戦力になる」と目を細める。自然を感じながらできることも気に入り、直斗さんは来春から工房で働くことにした。

「自分が死んだ後、子どもはどうなるのか」一。生田さんが工房を開いたのには、こうした保護者の不安を少しでも和らげ、障害のある人たちの「もうひとつの大きな家」をつくりたいという思いがあった。

僧侶の生田さんは銀行員だったころから、人とお金のかかわりについて問い続けてきた。「現代は、何でも貨幣に換算するグローバル社会。顔が見えず、悪いことをする人が増え、知的障害や認知症の人は簡単にだまされてしまう」

一方、お金では買えない「助け合い」を大切にするのがコミュニティ。「助け合いがあり、自給自足に近づければ、お金だけに頼らなくて済み、安心感が増える」

しかし、障害のある人が自立するには、やはりお金も必要。生田さんも「親を頼らず生きていくには、最低月三万円以上の工賃が必要」と考える。

そんな生田さんの考えに共鳴するように三月、愛知県の服飾雑貨製造卸売会社で天然素材にこだわるブランドを担当する松本雅史さん(44)から、Tシャツなどを染色する継続的な仕事が舞い込んだ。松本さんは「普通の草木染ではなく、古代からの染色法という特徴があり、技術的にも優れている。障害があっても、その人にしかできない仕事を探すという工房の考え方に、高い工賃を支払えるよう協力したいと考えた」と話す。

この受注で、工房の月額工賃はB型事業所の全国平均の倍に相当する三万円を支払うめどがたった。五月末から東京で始まる展示会に向け、工房で商品の準備を始めている。

工房で指導する友禅作家の山本晃さん(74)＝京都市＝は「この子どもたちは、すごい才能をのぞかせることがある。それぞれの感性や得意に合った作業を見つけ、互いを生かし合ってほしい」と願っている。(砂本紅年)

障害者アート展 県議会ロビーに絵画や工芸作品 /兵庫 毎日新聞 2018年4月27日
兵庫県議会議長賞に輝いた自らの作品の前で、黒川治・県議会議長（右）と話す木村篤志さん＝神戸市中央区の県庁で、井上元宏撮影



障害者の絵画や工芸作品40点を展示したアート展が6月15日まで、神戸市中央区の県庁3号館1階・県議会ロビーで開かれている。入場無料。
障害者のアート作品を県内で巡回展示するプロジェクトの第一弾で、県議会を身近に感じてもらうと開催した。県障害者芸術・文化祭美術工芸作品公募展への応募作品約420点のうち、県議

会議長賞の作品などを展示している。

県議会議長賞を受賞したのは、木村篤志さん（24）＝伊丹市＝が海底を泳ぐ大きなタコをモチーフに描いた絵画作品「ジャイアントオクトパスの襲撃」。1歳から絵筆を握っていたという木村さんは「さまざまな作品をつくるのは楽しい」と話していた。【井上元宏】

サッカー J2 大宮アルディージャ 手話で応援一緒に ノーマライゼーション知って 6月2日、カマタマーレ讃岐戦 /埼玉 毎日新聞 2018年4月27日

サッカーJ2の大宮アルディージャの試合を、手話で応援するイベントが6月2日、NACK5スタジアム大宮（さいたま市大宮区）で開催される。2006年に始まり、いったん中断した後に10年から毎年開催しており、今年で10回目。

2005年に知的障害者のスポーツの祭典「スペシャルオリンピックス（SO）」の世界大会が日本で初めて開催。そのボランティアだった県立大宮ろう学校（現大宮ろう学園）の江藤千恵子教諭ら市民有志が、アルディージャのJ1昇格を機に「目に見える形でノーマライゼーションを訴えたい」と企画。チャント（応援歌）の、故忌野清志郎さんの「雨あがりの夜空に」の替え歌を、江藤教諭が手話で訳した。

今年は6月2日のカマタマーレ讃岐戦で開催し、1500人をアルディージャが無料招待。参加者には、イベントオリジナルの手話をデザインしたオレンジ色のTシャツが配られ、キックオフ1時間前の午後3時から、手話応援を練習する。

江藤教諭は「当日は障害を持つ当事者も参加するので、障害のことを知ってほしいし、2020年の東京パラリンピックに向けた課題を考えてほしい」と参加を呼び掛ける。

参加申し込みは、往復はがきに住所、氏名、電話・ファクス番号、メールアドレス、参加人数（10人まで）を明記して〒330-0854 さいたま市大宮区桜木町2の292の1、毎日興業内「手話応援実行委」事務局。締め切りは5月7日（消印有効）。問い合わせは実行委（048・642・1238）。【錦織祐一】

日本点字図書館が都心に「ふれる博物館」オープン



福祉新聞 2018年04月27日 編集部
「モナ・リザ」の色を思い起こしたと話す大塚さん

社会福祉法人日本点字図書館（田中徹二理事長、東京都）は11日、立体化した絵画などを展示する「ふれる博物館」を都内に開設した。視覚障害者が作品を手で触って鑑賞できる。第1弾の企画はレオナルド・ダ・ヴィンチ展。広く知られた名画など24点が並ぶ。

「この絵を見た時の色が蘇りました」。都内に住むはり治療師、大塚郁代さん（81）は13日に同館を訪れ、『モナ・リザ』を触りながら声を弾ませた。石こうでできたレリーフ

は、イタリアのアンテロス美術館が製作したものだ。

もともと美術館めぐりが好きで、40歳頃に全く見えなくなったという大塚さん。その後も美術館に通った。「これまでは説明だけで寂しかったけれど、これなら楽しい」。

展示品は一部を除き、大内進・国立特別支援教育総合研究所名誉所員の所蔵品。中でも『最後の晚餐』は世界に3点しかない希少品だ。絵画のほか自走車などダ・ヴィンチの発明品の模型も並ぶ。

展示品はすべて音声ガイド付きで、同図書館の職員も来館者に一つひとつ案内する。音声ガイドを収録したCDもお土産として持ち帰ることができる。同図書館は年間で700～800人の来館者数を見込む。

自身が全音で「さわる文化」を提唱する広瀬浩二郎・国立民族学博物館准教授（民俗学）によると、展示物を触ることのできる博物館は日本では1980年代以降増え始め、現在2ケタはあるという。

今回オープンした「ふれる博物館」については「アクセスが良いし、視覚障害者が1人で安心して行ける環境が整っている。そういう所はあまりない」と話している。

ダ・ヴィンチ展は7月14日まで。次の企画内容は未定だが、博物館は基本的に常設だ。JR高田馬場駅から徒歩10分、開館は毎週水・金・土の10～16時。入館は無料。

I & C、家具+福祉で新たな価値（アントレプレナー） 佐田幸夫社長

日経産業新聞 2018年4月27日

I & C（大阪市）は縮小する国内の家具市場で成長を続ける数少ないスタートアップだ。社長の佐田幸夫氏（41）の実家は木製建具屋。知見のある家業の周辺領域で起業し、ボタン一つで自由に高さを変えられる洗面台など、機械や電子制御を組み合わせた家具を開発、販売している。人に優しい家具を通して見つめるのは、世界的な高齢化社会の到来だ。

■デザインも重視

佐田幸夫社長 2000年、リフォーム会社に就職。04年、実家の木製建具屋に戻る。08年、I & Cを立ち上げる。13年、電動昇降家具LAP開発。



昨年秋、ドイツで開かれた医療機器の展示会。来場者の注目を集めていたのが、I & Cの電動昇降機能付きの洗面台「LAP」だ。台座部分にアクチュエーターが仕込まれており、ボタンを押すだけで車いすに乗る人が使いやすい62センチメートルから110センチメートルまで1センチメートル刻みで高さを調節できる。車いすに乗る人や、つえをつく人でも使いやすいと好評だった。

高さを変えられる洗面台が市場になかったわけではないが、福祉機器の色合いが濃くデザインは二の次だった。LAPでは天然石や天然木を使い、無機質さを薄めた。最新モデルは昨年秋の発売以来、国内の介護施設や病院などで400台以上採用され、台湾や中国からも引き合いがある。

I & Cは佐田社長が2008年に設立し、当初はオフィスや商業施設の内装設計、家具のオーダーメイドを手掛けてきた。ただ、足元で力を入れているのは「LAP」のような家具と福祉機器の融合製品だ。自社の強みであるデザイン性の高い家具に、昇降などの機能性をかけあわせて、新市場を開拓する。

目下、LAPのさらなる進化に向けて奮闘中。カメラで口の中を撮影して、集めたデータから状態を解析する洗面台の開発が目標だ。最近では病院や介護施設向け製品に知見があるとの評価が関係者の間で浸透し始めた。大手ゼネコンと組んで病室向けの多機能家具の製品化も進めている。

「家具に新しい価値をふき込みたい」と語る佐田社長。専門紙「ホームリビング」を発行するアイク（東京・台東）の推計によれば17年の日本の家具市場は約3兆2000億円。新設住宅着工戸数の減少で、規模は1990年代前半の半分ほどに縮小した。

「家具業界は使う材料も機械も商流も、何十年変わっていない。衰退産業と言われても仕方ない」。既存の家具の延長では本場の欧米には勝てない。日本ならではの家具を考え抜いた末、高齢化対応にたどり着いた。

今こそ明確な戦略を描くが、起業までは曲折があった。

実家は岡山県の木製建具店。自宅の横に工場があった。「両親の会話は注文が入ったとか、資金繰りがどうだとか、仕事のことばかりだった」と振り返る。

幼い頃はロードレースの選手を目指していた。高校生になりプロになることはあきらめたが、大学生になってもアマチュアのレースには出続けた。就職活動の期間中もバイクに夢中。結局、二次募集している会社の中から家業に近いリフォーム業者を選び入社した。

実績評価の厳しい会社だったが、入社2カ月でトップセールスを達成。「飛び込み営業はいつもゼロからのスタート。できるかどうか悩む前にやってみる姿勢が身についた」と話す。

入社から4年後、姉にから家業を手伝って欲しいと頼まれ、実家に帰ることを決めた。「経営に関わってみたい」という漠然としたあこがれがあったという。

設計や現場管理、新規開拓の営業を担当。3年ほどして、自分で新しいものを作りたいという気持ちがふつふつとこみ上げてきた。「ゼロをイチにする仕事をしたかった。（家業とは）目指す方向が違った」。実家を飛び出し、大阪でI&Cを立ち上げた。ただ、けんか別れしたわけではなく、実家には製造を委託する。

■家具業界を変えたい

日本には欧州の有名ブランドの製造を手掛ける技術の高い工場もあるが、全体としては価格競争に陥り、疲弊している。これが佐田社長の国内家具業界の見方だ。「現状を変えたい」との思いから、国内約800の家具製造や樹脂メーカー、金属加工業者と製造面で協力する体制を築いた。

海外の家具の本場にも足がかりを築こうとしている。17年末、デンマークにデザインや商品開発を手掛ける現地法人を開設。高福祉国家のデンマークで採用が決まれば、世界中でI&Cのブランドが広がるとの狙いだ。米国ニューヨークにもショールームを開いた。

I&Cの17年11月期の売上高は約5億円で、空間設計や家具のオーダーメイドが中心。LAPが占める割合は1割ほどだが、今後引き上げていきたい考えだ。「あと20年もたつと世界中で高齢化の問題が顕在化する。自社の製品を解決に役立てたい」。佐田社長の目には、家具業界は成長産業に映っている。（香月夏子）

児童施設の性暴力、相談促す

共同通信 2018年4月27日

児童福祉施設に入所している子どもたちの間で、性的暴力などが起きている問題で、厚生労働省は27日、子どもが相談できる窓口や担当者に関する情報を施設内で掲示したり、連絡先を記したカードを個別に配布したりすることを要請する通知を出した。加藤勝信厚労相は同日、閣議後の記者会見で「安心して暮らせる施設で、このような事案は起きてはならない。実態調査をした上で発生防止策を検討したいが、それに先立ち、通知を出した」と述べた。通知では、施設職員が日頃から子どもの様子を見守り、変化への感度を高めるとともに、1対1の会話の機会を積極的に設けることも求めた。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

